

I 総論—「甘え」とは何か

「甘え」を通して 初めて浮かび上がる アンビヴァレントな心模様



西南学院大学大学院人間科学研究科 教授、感性教育臨床研究所代表 こばやしりゅうじ 小林隆児

はじめに

アタッチメントにまつわる事象は、多様な情動の蠢く関係世界である。情動は乳児と養育者のあいだで絶え間なく立ち上がり、関係と文脈を通して多様な意味をもったものへと変容を遂げていく。最初は未分化な快と不快でしかなかった乳児の情動は、養育者との濃密な交流を重ねる中で、喜怒哀楽をはじめとする多様な感情へと分化していくが、同時に明確にカテゴリーで捉えることのできない広義の情動である力動感 vitality affect も常に蠢いている。当初乳児の情動の発露は泣き声として体现されるが、けっしてそれだけではない。情動の動きはからだの動きとしてじつにわかりやすいかたちで文字どおり体现される。養育者はそこに乳児のこころを感じながら養育する。情動の動きはこころの動きそのものを示すことからわかるように、こころとからだは不可分なかたちで表に現れているものである。

アタッチメントから「甘え」へ

私のアタッチメントへの関心が強まったのは、四半世紀前に母子ユニットを創設してからである。当初は、自閉症の中核的症候である対人関係障害が一体どのような性質のものかをこの目で確かめ、早期診断、早期治療、さらには予防への道を切り拓きたいとの思いから始めたものであった。しかし、乳幼児期早期の母子を関係の相で観察する中で、次第に

私は、自閉症、発達障碍などの診断名にとらわれることの弊害を強く意識するようになった。生後数年間の母子関係に見られる様々な事象は、こころがどのようにして発達成長していくのか、こころがどのようにして病んでいくのか、精神医学の根本問題を考える上で大きなヒントを提供してくれたからである。その最大の要因は母子ユニットという恵まれた環境で徹底的に関係の視点から観察したおかげであるが、その際、アタッチメントにまつわる母子関係の様相を「甘え」の観点から捉えることによって実感を持って理解することができるようになった。

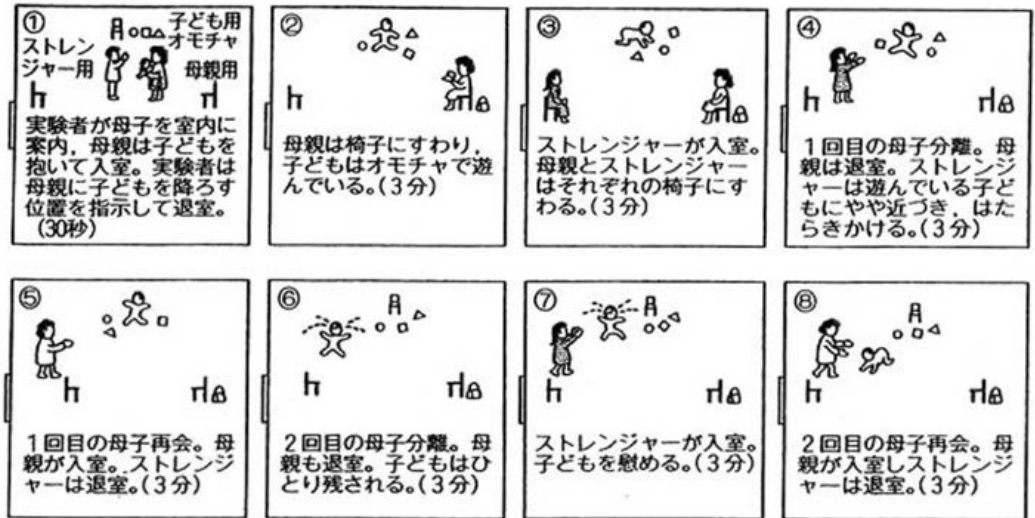
独特な関係病理としての「あまのじゃく」

母子関係の観察の際、私も新奇場面法(図1)を用いた。計55組の母子を観察し(小林、2014)、録画した映像を何度も繰り返し見ていく中で幾多の発見をした。

その一つは、1歳台の母子に見られる独特な関係の難しさである。自分になつかない、視線を合わせないなどの相談で母親は来院するが、新奇場面法でその関係を見ることによって独特な特徴を掴むことができた。目の前の母親が関わろうとすると、子どもは回避的態度を見せるが、いざ母親が目の前から消えると、心細い反応を見せて母親を求める。しかし、母親が戻ってくると再び回避的になり、先ほど見せた心細さがまるでなかったかのような態度を見

〈図1〉新奇場面法
(strange situation procedure)

母子の愛着行動の発達や種類を評価する観察法。1965年、米国の心理学者メアリー・エインスワースらは、母親と赤ちゃんに「見知らぬ部屋」(実験室)に入室してもらい、右記にある8つの場面で赤ちゃんの動きを観察・記録。この実験を対象を変えて繰り返し、赤ちゃんの愛着行動に関する個人的な差異を明らかにした。



せる。ただ母親を避けるという単純なものではない。母親の見えないところで心細い反応を見せているからである。母親は子どものそうした姿を目にしているからそんな思いに気づかない。残念ながら、臨床家は母親の目を通して見た乳児の姿しか知らないことが多い。自分の目で直接観察することの大切さを実感したものである。

当初私は子どものこのころの動きを捉えて「甘えたくても甘えられない」心理として表現した(小林、2014)。アンビヴァレンス(両価性)といわれるものである。さらにこの独特な関係の難しさは、「ああ言えばこう言う」あまのじゃくな子どもの姿と重なり、この関係病理を「あまのじゃく」として概念化した(小林、2015)。

ついで、2歳台になるとさらに大きな変化が起こる。それまで明瞭に認められた心細さからくる不安は外からは窺い知ることが困難になり、それをカモフラージュするような独特な振る舞いを見せるようになる。それはじつに多様で、私が直接観察で捉えることができたものを図2に示すが、これらの振る舞いは不安の解消や緩和の方策としての役割を果たし、不安への対処行動として理解できるものである。これらが恒常化し固定化した状態こそ従来症状として捉えられてきたものである。図2では各々の対処行動がのちのちどのような病態へと発展するかを、

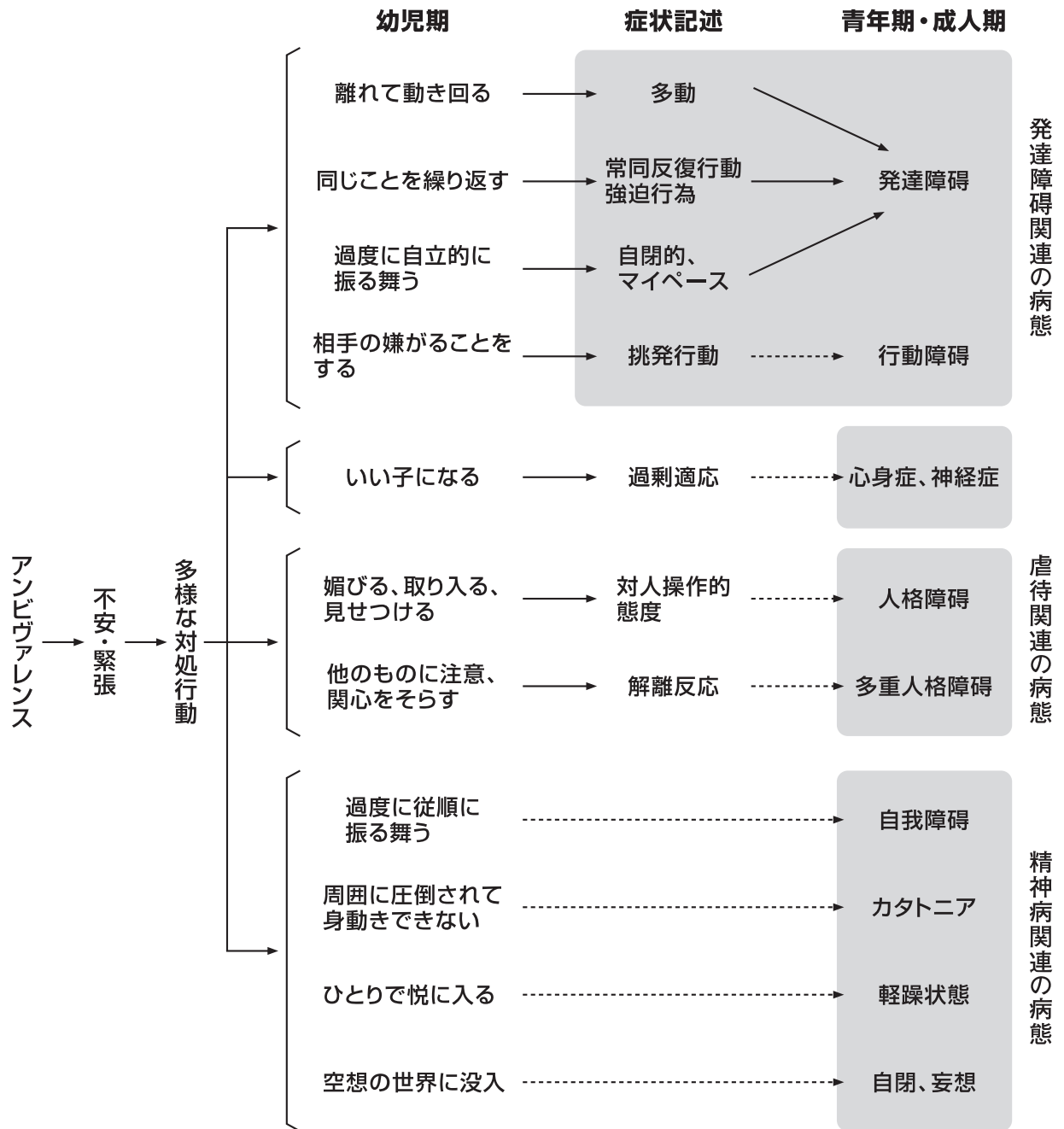
私の推論も交えて右列に示している。

潜在化した不安は情動の動きとして 感じ取ることができる

ここで治療する側から見れば、大変やっかいな問題が生じていることに気づかされる。心細くて不安な子どもであれば抱きかかえることで比較的容易に不安を解消することができようが、彼らは自らの不安を隠し、その防衛として様々な対処行動を取るようになる。なぜなら自らの不安が他者に気づかれることはとても恐ろしいからである。それゆえ彼らの不安は掴み難くなる。不安は無意識の層に潜在化し、それに代わって症状が前景化する。症状だけが彼らの意識にのぼり、私たちもそれに目を奪われる。治療が難しいのはそのためである。

そこでヒントになるのは、コミュニケーションを二重構造で捉える視点である。一般にコミュニケーションは話し言葉を介する言語的コミュニケーションと身振りや表情を介した非言語的コミュニケーションに二分されることが多いが、忘れてならないのはその底流に、当事者も気づかない無意識の次元でのコミュニケーションが生誕直後(あるいはそれ以前)から一貫して息づいていることである。感性的コミュニケーションである。

先に述べた無意識の層に潜在化した情動体験は感



〈図2〉アンビヴァレンスへの対処行動、症状、そのゆくえ (小林、2018、P.38)

性的コミュニケーションの相で掴み取ることができ
る。アンビヴァレントな「甘え」という情動の動き
は症状の背後に蠢いているからである。それを掴み
取ることを可能にしてくれるのは理性ではなく感性
である。目には見えないゆえ客観的に捉えがたいが、
感じ取ることによって初めて掴み取ることができる。誰に
とっても難しいのはそのためである。ここで手がかり
となるのがアンビヴァレントな情動を感じさせる、
乳児のからだの動きである。そこに明瞭な

ちでアンビヴァレンスを見てとることができるから
である。母親が近くに来ると、さりげなく母親の肩
に腕を回して抱っこされたような素振りを見せなが
らも、母親が何かをしようとするときにすぐにその腕を
引っ込める。そんなデリケートな動きである。

こうしたからだの動きは、2歳台になると影をひ
そめるが、こころの動きとして捉えることができる。
ただし、それに気づくためには私たちも当事者意識
を持って関わり、その中で双方のこころの動きを問

主観的に感じ取ることが不可欠である。たとえば子どもから大人まで以下のようなかたちで捉えることができる。

相手の話題に同調して共感的態度を取って返すと、途端にそうではないかのような反対の態度をとる。あるいは、直接面と向かって語り合っているときには心ここにあらずの態度だが、面接が終わろうとすると途端に治療者の機嫌をとる態度へと豹変する。両者の心理的距離が接近すると相手は回避的反応を示すが、こちらが離れようとする相手は接近するのである。あるいは、怒りなどの本音が出そうになると途端にそれを引っ込める。口には直接出さないが何か含みのある言い方で語る。何か言いたそうだがまわりくどく関係なさそうなことばかり口にする。そんな語り方、語り口調で示される場合もある。

以上取り上げた患者のこころの動きは、乳児が母親との関係病理として見せた「あまのじゃく」そのものである。なぜなら、これらのこころの動きに「あまのじゃく」と同型のゲシュタルト（ひとまとまりの姿、形態）を見てとることができるからである。さらに、発声に伴う情動の動きを感じ取ることによって、アンビヴァレントなこころの動きを捉えることもできるのだ。

私たちが面接で心掛けなければならないのは、患者が何を語るかではなく、患者がいかに語るか、こころを配ることである。なぜならそこにこそ患者の情動の動き、こころの動きが端的に表れているからである。

屈折した甘えとしての対人操作的態度

ここで一つ例を挙げて説明しよう。図2の「対人操作的態度」を示し、将来人格障碍へと発展することが危惧される場合である。この種の対処行動は虐待がらみの例がほとんどだと考えられるからである。

2歳になった男児がいかにも気だるそうな無気力な態度で母親の前を無目的に動き回っている。ときにさり気なく母親に近づいて椅子に座っている母親に背を向けながらもたれかかる。本来甘えたければ、正面から母親に抱きつくものである。大人の世界の「面従腹背」ともいえる対人態度の幼児版を見る思いである。そこに私は子どもが母親に媚びる姿を発見する。あるいは、懸命になって働きかける母親に対してちょっと相手をしてはすぐに気移りする男児が、上手に遊んでくれるスタッフと二人きりになり、次第に相手に心を許すようになった頃、母親が部屋に戻ってくる。その途端にスタッフに差し出そうとした両腕を引っ込め、笑顔を取り繕って母親の方に小走りで接近し、母親の手を引いて一緒に遊ぼうとする。母親が戻ってきたので喜んでいるなどと単純に考えてはいけない。他人に心を許そうとしたところを母親に見られたのではないかと不安になって媚びを売る姿を私はそこに発見する。妻をもつ男性が他の女性と浮気している現場を妻に発見されて慌てふためきご機嫌をとるメロドラマの1シーンを彷彿とさせる。

この種の映像を見ると、こんな幼な子が親に媚びを売るなど信じられないと、誰もが驚きの声を上げるが、子どもは母親と一緒に生きていくために気に入られようと必死なのである。

アンビヴァレンスという情動の動きは「甘え」にまつわる情動の世界である

冒頭で述べたように、アタッチメントにまつわる事象は情動の蠢く世界である。情動は常に変化し続け、一時も同じ状態に留まることはない。とりわけアンビヴァレントな情動の動きは一言で表現できるような単純なものではない。どっちつかずの代物である。つかみどころがないところに最大の特徴がある。しかし、情動の動きはこころの動きそのものであることを考えると、たとえアンビヴァレントな情

動だとしても、こころの動きとして確実に掴み取ることが治療上不可欠である。アタッチメントを「甘え」にまつわる事象としてみることで、母親の前で振る舞う子どものこころの動きを、私たちの人間世界の心模様となんら変わらないものとして確実に捉えることができる。

臨床家は感性を磨くことが求められる

以上の理由から私は学生のみならず現場の臨床家をも対象に「感性教育」(小林、2017)を試みるようになった。新奇場面法で録画した映像を実際に見てもらうことでアンビヴァレントなこころの動きを肌で感じ取ってもらうことが臨床力を磨く上で不可欠だと考えているからである。これまで述べてきたように、アンビヴァレントなこころは人間誰しも体験的に理解できる性質のものである。それができて初めて、アンビヴァレンスが強まったとき、人はどのように振る舞うかが実感をもって理解できるようになるのだ。自らの体験をもとにした理解こそ本来の共感的理解であるが、アンビヴァレンスの理解が誰にとっても一筋縄でいかないのは、自らの内面に日頃潜伏している情動体験を喚起することによって初めて気づくことができるようになるからである。大なり小なり誰しも幼少期の「甘え」体験を想起するのはつらいものだが、私たちが向き合う相手、子どもから大人まで、彼らは自らのアンビヴァレントな体験に圧倒され、もがき苦しみ、ついには症状というかたちで対処することでしか生き永らえる術がなかった人たちである。まずは私たちが自分に向き合うことが求められるのはそのためである。

おわりに

本章は「甘え」とは何かを論じることがテーマである。改めて考え直してみると、私は「甘え」とは何かを正面から考えたことはあまりなかったように思う。私たちにとって日常語である「甘え」をわざ

わざ定義する必要などないと考えてきたからである。現に映像を見た人たちはみな異口同音に子どものこころに「甘えられない」もどかしさを語っている。「甘え」を正面切って論じることが難しいのは、本来の「甘え」は当事者も意識しないところで立ち上がるもので、そこに「甘え」を意識した途端に本来の「甘え」ではなくなるからである。母親が子どもに「甘えてもいいのよ」と優しく言葉を掛ける場面に遭遇することがあるが、そう言われた途端に子どもは素直に甘えられなくなるものである。「甘え」とはそういうものである。

本稿で私が取り上げた「甘え」にまつわるこころの動きはすべて屈折した「甘え」であって、本来の「甘え」ではない。しかし、具体的に述べた「甘え」にまつわるこころの動きは誰にでも自らを振り返る中で自ずからわかるような代物である。子どもから大人まで患者であってもそれを指摘されれば自ずから気づく。それこそ根源的な意味での治療だと私は考えている。その気づきが生まれたときに初めて健康な「甘え」が立ち上がると思うからである。

文献

- 小林隆児(2014)『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』ミネルヴァ書房
- 小林隆児(2014)『甘えたくても甘えられない』河出書房新社
- 小林隆児(2015)『あまのじゃくと精神療法』弘文堂
- 小林隆児(2017)『臨床家の感性を磨く』誠信書房
- 小林隆児(2018)『関係の病としてのおとなの発達障碍』弘文堂

キーワード：アンビヴァレンス ambivalence

同一の対象に対して、愛と憎しみ、友好的態度と敵対的態度のような、相反する心的傾向、感情、態度が同時に存在する精神状態を指し、両価性とも訳されている。精神医学の領域で最初に登場したのは、精神科医オイゲン・ブロイラー(1911)が統合失調症にみられる基本症状の一つとして取り上げたことによる。当初彼は統合失調症に顕著に認められるとしながらも、のちに正常な心身機能においても普遍的に認められると考えるようになった。